

日本の美と欧米の美（狩野芳崖）



* 文書館図書726-17-11「防長先賢肖像絵はがき 狩野芳崖」

解説

狩野芳崖（1828～1888）は幕末から明治時代にかけて活躍した日本画家です。長府藩の御用絵師の家に生まれ、19歳の時、藩命により江戸に出て狩野雅信に学びました。のちに塾頭選ばれ、橋本雅邦とともに門下の双璧と称されました。

明治維新以後、伝統美術が顧みられない時期がしばらく続きましたが、1882（明治15）年ごろから国粹主義の台頭とともに、伝統美術の評価が再び高まりました。芳崖はフェノロサや岡倉天心らに認められ、日本画の革新運動に参加し橋本雅邦らとともに優れた作品を残しました。また東京美術学校（現東京芸術大学）の創設にも関わりましたが、その開校を見ずに1888（明治21）年に没しました。

左の写真は1926（大正15）年発行の「防長先賢肖像絵葉書第1輯」に収められた狩野芳崖の肖像写真です。



* 上の写真は1979（昭和54）年10月に開催された、山口県立美術館の開館記念特別展「生誕一五〇年 狩野芳崖」の図録です。代表作「悲母観音」（左の写真の右上）をはじめ国内外に散在する彼の貴重な作品87点および橋本雅邦、横山大観など芳崖をめぐる作家の作品が展示されました。